

AFTERNOON TEA

日本医科大学生理学（生体統御学）

洲鎌 秀永

米国留学を通して思うこと

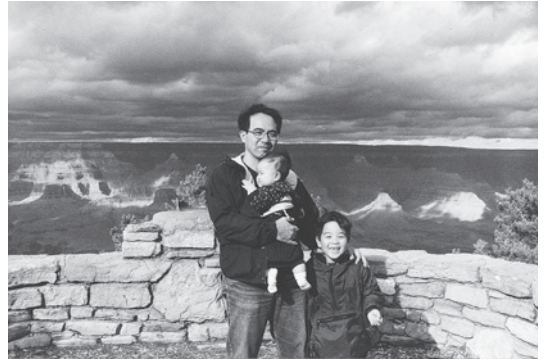
愛知医科大学の松井卓哉先生さんよりバトンを受け取りました。

私は91年に群馬大学医学部を卒業し、4年間の臨床をえて、95年に群馬大学生理学大学院（三浦光彦教授）に入学しました。博士取得後は、4年間、コーネル大学（Tong H. Joh 教授）で、1年間、スクリップス研究所（Tamas Bartfai 教授）にて研究しました。03年より現在の日本医科大学生理学（生体統御学）教室（芝崎保教授）にて研究・教育に従事しております。

先日、松本での日本生理学会で、国内からの海外留学数の減少、基礎医学論文数の低下（臨床系は維持）などが話題となりました。この機会に、私の留学体験を少しお話したいと思います。

私はJ1ビザで98年に留学し、ラボからのサラリーのみでの生活を立てました。当時、アパートの一月の家賃が1100ドルほどで、月2000ドルのポストクの給料で生活するのは殆ど無謀だったと思います。後で、妻と息子が渡米し、家族で生活することになりました。家族同伴で留学するのはサラリー2000ドルでは、やはり厳しいものがあり、それなりの蓄えをして留学をされることをお勧めします。また、ニューヨークやロサンゼルスなどは家賃が予想以上に高いということを知っておいたほうがいいでしょう。当時、ワンベッドルームで1000ドル以上、ツーベッドルームで1500ドルほどでした。単身であれば、ポストクのサラリーだけで大丈夫だと思いますが、蓄えがあったほうがベターでしょう。

留学期間中、会話リスニングに苦労しました。私は、受験英語で、読み、書きについてはこなしていたのですが、リスニングなど全く歯が立たず、最初のころは失望の毎日でした。1年目の終わり



グランドキャニオンを背景に、長男、長女と一緒に。

ごろ、慣れてくるにしたがって、なんとかコミュニケーションを取れるようになっていました。当時、韓国から留学していた友人に聞いても、私と同じことを感じていることを知り、なんとなく安心したものです。よく、1、2年の留学で英語をマスターしてくる人を想像する人も少なくないかも知れません。私の印象では、1、2年の短期留学でリスニングを習得できるほど甘くはないと感じました。コミュニケーションが取れ友達が出来ると、仕事の能率も上がったものでした。“留学する前に、英語リスニングを”，と思います。

留学中、韓国、中国、イタリア、アメリカ等、他国籍の友人と食事会をすることが少なくありませんでした。当時、私は、国際人とは英語を流暢に話し、西洋の文化に精通していることだと思っていました。が、多くの外国人に接する内に、彼らにいくらアメリカの知識を披露しても、いまひとつの反応だったのです。ヤンキースのデレク・ジータの打率を披露してみても、なんとなくしらけた感じでした。そんなある時、ハウスに友人を招き、食事会をする機会がありました。私は料理が不得手ながら、奮闘しながら、私流の豚汁(?)を作ってみせたのです。それに加え、妻の作った

ちらし寿司やまき寿司などオーソドックスな日本料理を友人たちは、とても喜んで食べてくれました。その時思ったのは、日本の文化を何か披露できたらすばらしいと感じたものです（私の場合、そのことに気付くのがちょっと遅かったのですが）。寿司を握ってみせたり、空手を披露したり、和楽器を演奏したり、生け花を披露でもしたら、あなたに一目置いてくれるかもしれません。実際、彼らはそういう日本独自の話題に反応し、いろいろ質問してきたものでした。

留学体験とは何だったのか、考えることができます。それは、日本を外から見ることを可能にし、自己のアイデンティティを考えさせる機会となり

ました。アメリカに行って分かったこと。低俗ですみません。それは日本の食事のすばらしさです。それ以外にも、似たようなことを感じたことが少なくありませんでした。今普通にしていることが、実は普通じゃないということに改めて気付かされたのは、留学のメリットだと思います。

留学時には、ニューヨーク大学のサバン教授と共同研究をされておられた藤田保健衛生大学の中島昭先生には大変お世話になりました。又、北里大学の緒方雅則先生、藤田保健衛生大学の清水善徳先生、山形大学の斎野幸子先生らとはラボが一緒で、実験を通して交流を深め、充実した留学生活を送ることができました。

玉川大学脳科学研究所

塚元 葉子

東京都医学総合研究所の山形朋子さんからバトタッチしていただきました。玉川大学・脳科学研究所の塚元葉子です。Afternoon Teaは、生理学雑誌が届くと私が最初に読ませていただくページであり、すでに立派な業績を積まれた素敵な先生方や、これからのご活躍を期待される若手の皆様、研究に対する真摯な姿勢を拝見できるありがたい企画です。そこにまさか私のような者が執筆させていただくなんて、何かの間違いかもかもしれません。こんな私が何を書くべきなのか悩みましたが、私の学生時代、古きよき時代の他愛のない思ひ出話を少しご紹介しようと思います。

私が卒業研究から修士修了し、いったん就職して退職した後、また博士課程に戻った研究室では、卒研生など新入りの学生がラボのみんなの昼食を用意するという伝統がありました。現代のラボでは考えられないかもしれませんが、大きななべに湯を沸かし、多いときには十人以上のうどんをゆでて、めんつゆ、ねぎ、卵、わかめ、納豆、天かすなどを用意します。毎日毎日、うどん（あるいはそば）です。これらに必要な材料の調達からすべてを引き受けます。（おかげで外食と比べ昼食代は格安となり、貧しい学生の懐は大いに助

かりました。）

そういうことをすべて飲んで卒業研究生として入ってくるとはいえ、学生さんによっては理不尽を感じたりすることもあったでしょう。私も卒研時代は受け入れながらも時々つらいこともありました。人数分ゆでたと思っていても、私が先生への食後のお茶を入れている間に、食べ盛りの男性方が残りを瞬く間に平らげてしまって私の分は残っていなかった、という経験を何度もしたものでした。

このようなことをなぜするのだろうか？はっきりとその理由がわかったのは、博士課程に戻りしてからでした。もちろん私も先輩としてではなく、新古品として？うどん係を率先してやらせていただきましたが、この仕事をどのようにこなすのか？というのが各人各様で見ていて大変面白い。一度、教員として学生を指導してきた目では、若いころと全く違うものが見えました。「うどん係」という切り口から、その学生の人となり、性格、几帳面さ、器用さ、などが非常によく分かるのです。材料の調達がとても上手で、安くておいしいものを、切らすことなく冷蔵庫に入れておくことができる能力、ねぎを薄く切れる能力、どん

な乾麺を使うにしろ、ゆで加減を絶妙に量れる能力. 他人としなやかに協力できる能力. あるいは、当番からちゃっかり外れることが得意な能力もあります. こうしたことを観察していれば、その人が、どのような研究に向いているのかが見えてきます. 半年以上この下積みを経験している期間、本人は先輩や先生のために昼ごはんを用意してあげているんだと思っているその期間に、実は教授から細かく行動を分析され、卒業研究テーマが与えられるのでした. そのテーマたるや、なるほど彼にはこの実験材料でこの研究課題ですか、と感服せざるを得ないような、実に見事な采配でした.

私は万年プータローアルバイト研究員なので、誰か若い方を指導するという重責にあえぐことはない（人を育てる責任は、自分の子供二人だけでもう十分、手一杯です!）のですが、特に若い方個人個人の人となりを観察して理解し、お互いに助け合えるところを探してよりよい人間関係を構築していくことが、ラボが全体的にうまくいく重要なポイントなのではないかと考えています. 常勤でもなく、高い目標に向かって邁進するでもない、ラボの居候のような私ですが、こういうことを大切にして日々を過ごし、何らかのお役に立てれば、と考えています.

順天堂大学医学部薬理学教室

呉林なごみ

発散と取れん

山口大学大学院医学系研究科・生体機能分子制御学の岸博子先生よりアフタヌーンティーを引き継ぎました. 順天堂大学の呉林なごみと申します. 先週、楽しかった松本の生理学会が終わったところで書いています. 生理学会では特に本会議の他に、いろいろな先生方と食べ飲みながら研究を中心?にいろいろな話をするのが楽しみで、岸先生もよくご一緒させていただいています.

私はお茶大・生物学科を卒業した後、順天堂大学医学部薬理学教室に助手として就職しました. 最初は、小川靖男前教授のもとで骨格筋小胞体の Ca^{2+} -ATPaseの酵素反応過程や Ca^{2+} 遊離の研究などに関わりましたが、やがて筋細胞膜を取り除いたスキンドファイバーで実験するようになり、その後はペンシルバニア大学のS. Baylor教授のところで生きた骨格筋細胞の Ca^{2+} transientの研究に加えていただきました. また順天堂に戻ってからは、心臓を材料にした研究が増え、研究室に共焦点顕微鏡が入った時に心筋組織のライブイメージングを始めました. また、最近では筋細胞以外の細胞・組織の Ca^{2+} 調節の仕事にも関わらせてもらう機会も増えてきました. 学生時代から山



どこかの学会の飲み会で（右端が自分です）

登りとか秘境系が好きなので（体力がないのでバリバリじゃありませんが）、珍しい材料、変わったものに惹きつけられます. そういう意味で、研究

はいつもどれもなかなか新鮮で面白いのですが、うっかりすると謎が謎を呼び取れんせずに発散していく傾向があり、自制してまとめていかなければ、と思っています。

取れん、と言えば、私の仕事関係で未だに取れんしないのは自分の名前（姓）です。私が研究上使用しているのは旧姓の呉林ですが、順天堂大学では戸籍上の姓を使ってきました。昔、結婚した当初、人事担当課に通称(旧姓)を使いたいと言ったのですが、即拒否され、学内ではクニヒロさんと呼ばれています。本来は旧字の國と廣ですが、私は常用漢字の国と広が好きです。人々が書いてくださる宛名も何故か常用漢字・旧字の組合せだったりして、4通りあります。二つの姓をつないだ表記も私の場合は長過ぎて止めました。(パスポートには別姓併記していますが、航空券チケットにそれが取まりきらず空港のカウンターで発音

されることはありません。)最初はクニヒロも抵抗がありましたが、時間も経ち子供も成長する過程で今は全く違和感はなくなりました。ただ、以前は研究と学内業務は別々の世界で完結し、二つの姓の使い分けに混乱はありませんでしたが、時代の変化か(特にメールの発達で)両者が交差するようになり、あなたはほんとはどっち?とか、最近結婚した??とか今になって聞かれることが増えました。まあ振り返って、それではどうしていたら良かったか考えても、特に現状以外のやり方も思いつきません。論文や科研費などの申請書の名前は変わると継続性が途切れるので、変えなくて良かったと思います。結局、私は2種類の名刺を持ってテキトーに人に渡しています。こんな適当でも何とかなってきました。仕事や飲み会で「発散」してるからでしょうか。結局、「取れん」は難しそうです。